



「医師として患者としての人生」

～浜中和子さん＝医師、患者、乳腺疾患患者の会「のぞみの会」会長
リレー・フォー・ライフ広島実行委員長、がん患者団体支援機構理事長～



あんぱんマンの写真が、診療机をはさみ椅子に座る子どもたちに呼びかけている。こんにちは、という風に。わきには、色々な人形たちが待ち構えていた。皮膚科を主にした診察室には子どもが多い。休診時間でも、さきほどまでのにぎわいと笑顔が伝わってくる。

浜中和子は2009年、2010年、2011年も紫や黄色のTシャツを着て、リレー・フォー・ライフの会場にいた。この人がいるところにはいつも、人が集まっていた。マイクを握っても、パンを食べていても、知らぬ間にみんなが寄ってくる。

白衣を着ていても、そうでなくても、人が吸い寄せられていくのだろうか。



医師として診察室の椅子に座り、診察の合い間にふと目に着く左わきの壁に美しい写真が飾ってあった。南米・ペルーの世界遺産マチピチュ。石造りの山上に、悠久のときを感じさせるその風景には、色々な思いが込められている。飾る写真は、たとえばということでこの土地であったのだが、40カ国を旅してきた向うをいつも思っている。

全力で仕事をし、全力で旅をしてきた。ドクターであり患者であるよりも、人間として遠くを見つめる姿が伝わってくる。

「診療以外は、全部ボランティアをしている感じです。せっかく自分がいるので、要望されるのなら、できるだけ何でもやろうとしてきた。そこに至るまでにはターニングポイントがあった。それは、自分が乳がん患者になった、ということです」

1993年、42歳。それまでの自分と、それからの自分を、浜中はクールに自己分析する。仕事、患者、ボランティア、唯一の趣味の旅。実は、むしろこの時期から、その心はととても熱いものに変わっていった。



自ら、バリバリの医者だったと振り返って言う

。「私は医者、あなたは病気、私は治す人、こんな感じでしたね。死は患者さんのもの、私には無縁、と傲慢にもそう思っていた。極論ですけど、正直にいうとそうでした。まだ何も見えていなかった」

浜中によると、20年前のこのころ、医療の時代状況はこんな風だった。

患者の立場がととても弱く、医師への遠慮が普通だった。医師のひと言に揺れ動き、患者も医師も意志の疎通をしようという気持ちが薄かった。患者は、がんと聞くとすぐに死という言葉が頭をよぎる。がんであっても、誰にも家族にさえもいえない時代、死は身近にはない隔絶した遠い世界にある言葉だった。

「転移でもしようものなら、すぐ死に向き合う、身近に自覚したときに命の有限性に初めて出会って当惑する、そういう時代でした。」



あなたに会いたい RFL100人の物語

広島を主な舞台にし、常に最前線の現場で勤務医として診療にあたってきた浜中は、多くの人の死を目の当たりにした。だからこそ、医師と患者の関係を知りつくし、関係の変遷を語るができるのだが、この時期、自らが患者になったことが分析力をいっそう強めている。



数年前、NHKスペシャルでスタジオに呼ばれたことがある。朝の番組には、何度も浜中の姿があった。全国にいるがん患者は、乳がんに限らず、いまおかれた医療の状況と患者と医師の距離を語る、浜中の姿を見たことだろう。それは、まだ十分に語るができる医師であり患者が少なかったこともある。

「死は、医師としては身近だったけれど、自分としては遠いところにあった。けれど、病気になり、毎日を精いっぱい生きないと後悔すると感じた」

2週間の入院は久しぶりにゆっくりと過ごし、振り返ることも多く、決意もあった。医師として勉強をし、技術を身につけた自分の力を世の中に還元したいとまず思った。したがって今まで以上に仕事をしよう、と決意する。そして、趣味も一生懸命取り組もうと思ったのは、やはり患者になったからこそだと思っている。

患者会設立を3ヶ月後に呼びかけた。広島にはそのような会はなかった。不安、心配事を抱えている人に役立ちたいという思いは、同じ病院の看護師桜井征子につながる。「先生、実は私も2年前に」、「体験者同士の励ましを広めましょう」と申し出があり、自分が手術を受けた病院外来の乳がん仲間呼びかけた。広島県内での草分けとなる。

「これは医師に対して文句を言う会ですか」などと医師が聞いてくるほど、当時は患者会の存在は認められていなかった。いまでこそ、会員570人に増えた「のぞみの会」はこうして産声をあげた。



偶然だが、医師になって20年たったら開業をと考えていた。再出発には良い機会だった。開業となれば自分の責任が重くなり、とても多忙になることが予想できた。それでも、必要とされているなら、進む。前向きな旅立ちだった。

大崎上島(かみしま)は、瀬戸内海に浮かぶ島々でも、大きい。存在感のある島である。ここで生まれ、育ち、いずれ何者かになるとしていった。浜中少女は、探検家になりたかった。不思議なこと、目にしたことない世界の風景にひととき興味を示す、好奇心旺盛な少女だった。

開業は、肉体も精神も精神的にさせた。全力で地域の診療にささげることを決意した証に、それまでも増して医療に打ち込んでいく。

週末は患者会活動、それに間もなく登場する、がん患者団体支援機構の運営参加とリレー・フォー・ライフ広島への強いリーダーシップを発揮する時間につながっていく。したがって、休暇と言えは年に二回、ゴールデンウィークと年末年始しかなくなっていく、そんな生活の始まりがこのころからだ。



唯一の趣味だという「旅」は、瀬戸内海で過ごしたあのころから持ち続けてきた気持ちの発露といえるのかもしれない。ヨーロッパ、アメリカ、アジアと大陸に立つ。「結局、この時間だけは仕事をしたくてもできないところを選んでいたのでしょか。何でもこの目でみたいと出かけ、そのときだけは、ぼやーっとしています」というが、戻ればさっさと日常に戻る切り替えの早さは持ち前なのだろう。

あなたに会いたい RFL100人の物語

活動は広島にとどまらず、全国へと広がる。「のぞみの会」が始まって12年後の2005年、第1回がん患者大集会在大阪で開かれた、必死の思いで全国から集まった患者・家族は2000人にのぼり、NHKホールはがん関係者で埋まった。切実な顔、思いが、緊張感のある議論を誘い、真剣な議論は、毎年集まりを開こう、支援機構にしよう、とその後の運営方針の土台になる基礎が熱く語られた。

乳がんだけでなく、ホスピスケアを進めていくための会に広島でかかわった浜中は、がん患者団体支援機構の理事として参加した。2006年には広島で在宅ケアの全国大会患者部会を取り仕切り、全国の横のつながりを築く礎になっていった。

指触診だけでマンモ検診が伴わないために半年間発見が見逃される事態が、自身に起きた。マンモ検診の大切さを国に呼び掛ける68000人の署名の先頭に、この人はいた。大集会は2度目、3度目と続き、現場での放射線治療の遅れ、緩和ケアの大切さなど重要なテーマが提起されていった。両腕にまで忍び寄る痛みを取り除いてもらえずひたすら我慢を強いられる患者の現実、「痛いというのは私のわがままなのでしょうか」と漏らしながら耐える患者のありのままの姿を、浜中は見過ごすことはできない。提案は次々となされた。



★ ★ ★

リレー・フォー・ライフを浜中が知るのは、第1回の大集会在開かれたころ(2005年)にさかのぼる。

「こういうイベントをアメリカでやっているんだ。これはすごい、みんな笑っている」と、思った。

2006年に茨城県つくば市で開かれた、日本でお披露目となるリレー・フォー・ライフの会場に勇んで出かけた。国際基準のオーバーナイトではなく、まだトライアル段階だったが、目を洗われる光景がそこにあった。

——すでに、医師、患者としてご自身の活動に忙しくされていましたが、リレー・フォー・ライフを見てどんなことを考えましたか。

「これはすごいと感じた。つくばの会場に身を置き、患者が胸を張っていることにまず驚いた。「がんでもいいじゃん」というフラッグが衝撃的でした。その横断幕をもっている人の顔が何と明るいことか。こんなに元気です、がんばっています、と語りかけてくるようだった」

会場で一緒に時間を過ごした仲間はまだ、自身の病気を公表できないでいた。仲間たちと自然の成り行きで一緒に歩いている内に、「これからはみんなに言います」と変わっていった。

「そういう風に言える雰囲気があこの会場にはあった」と、懐かしそうに言う。がんでもよい。そして、ルミナリエ、サバイバーを大切にしているいくつかの取り組みが、それまでとは違う活動を誘っているような気がした。



(敬称略)